

<福島県知事賞>

税で助け支え合うフクシマ

二本松市立二本松第一中学校

2年 五十嵐 理紗

楽しそうに校庭を駆け回る児童たち。そこには思い思いの笑顔があふれている。やっ
と、私たちの望んだ景色が窓に映った。

ここは、私の住む県、フクシマ。あの日原発事故が起きた地。辺りにばらまかれた放
射性物質が、私たちが外で遊ぶことを制限した。当時小学生だった私が、静かになった
サッカーゴールや、友達とよく遊んでいたジャングルジムを見て、胸を痛めたことを覚
えている。

だから、除染のための重機が小学校に来てくれたとき、「また、前のように外で遊べ
るんだ。」とほっとしていた。そして、この除染の費用は、税金から出たものだった。

後日、税金について調べてみると、仮設住宅も税金によって建てられ、がれきの撤去
の費用も税金で賄われていることが分かった。

会ったことの無い人同士が納めあった税金で、私たちは知らないうちに助け合い、同
時に支え合っていたのだ。

昨年の4月1日から、消費税が5パーセントから8パーセントに引き上げられた。

増税で、お店で出さなければならない金額が高くなるのは、とても不便になると思っ
ていたが、それはみんなで助け合うためであり、また自分を支えてもらえるというこ
とを知り、これからは私も、「今まで支えてくれてありがとう。」の気持ちを込めて、今は
消費税を、収入を得るようになったら所得税なども、しっかり納めることのできるよ
うに努めたいと思う。

これから先、しばらくはフクシマの原発事故を完全に終わらせるために、やはり国民

一人ひとりの納税による、「助け合い、支え合い」が必要不可欠な時代になるだろう。

だからこそ、中学校に通う私たちも、まだ納税なんて関係ない、遠い話だ、と考えずに、自分たちも社会の一員なんだ、という自覚を持ち、税について今からじっくり考えていくべきだ。

私のふるさと福島も、だんだんと復興してきて、もとの明るさを取り戻しつつあるのかもしれない。

しかし、税金のおかげで今ここで、普段どおりの生活を送ることができるということは、私たちが忘れてはならないことだ。

未来の子孫たちに、きれいで安心できる環境を手わたしていけるかどうかは、21世紀に生きる私たちにかかっている。

税金を納め、事故の収束に協力することが、私たちの一つの使命なのではないのだろうか。